

■ 英語の諺 301-400 ★20220210

高橋伸治

301

Experience is the best teacher.

日本語訳

経験は最良の教師である。

日本の諺としてピッタリしたものは見当たりません。

標記の考え方は、座学的な知識より実体験が上位であるとしています。

同じ考えの諺としては「Experience is the father of wisdom.」があります。

しかし、ドイツの宰相ビスマルクは、

これに異を唱えて「A fool learns from experience, a wise man learns from history.」（愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。）という言葉を残しています。

302

It takes two to make a quarrel.

日本語訳

喧嘩するには二人必要である

。

日本の常套句として、「喧嘩両成敗」がありますが、ピッタリ当てはまるとは

言えません。

標記の諺は、喧嘩は両者が戦闘モードになって初めて成立するのであって、一方が相手にしなければ喧嘩にはならない」という意味です。。

バリエーションとして、「It takes two to quarrel.」があり、標記と同じ構造の「It takes two to make a bargain.」(商談には二人必要である。)があります。

303

An obedient wife commands her husband.

日本語訳

従順な妻は夫を支配している。

夫婦のあり方は様々ですが、日本にも「かかあ殿下」や「女房の尻に敷かれる」という常套句があるように、妻に実質的な権限がある方が上手くいくという考えが古今東西あるようです。

標記の諺は、表面的には「obedient」（従順な）妻と見えていても、実態は妻の方が夫を「command」（支配下に置く）しているとしていることが鋭い点です。

Extremes meet.

日本語訳

両極端は一致する。

日本の諺にはピッタリなものは見当たりません。

時として、「長所は短所」に通じるとされていますが、大分違うと思います。

実生活で標記の諺が使える状況は想定しにくいのですが、例えば、友人間の会話として、普段正反対の趣味だと思っていた二人が同じ物を選んだ際の驚きの言葉でしょうか。

305

It's an ill wind that blows nobody any good.

日本語訳

誰にも良いことをまたらさず吹く風は悪い風である。

日本の諺としてはピッタなものは見当たりません。

風の強さにもよりますが、航海などは、必要なものであり、一方、火災の際の風のように、望ましくない風もあります。

標記の諺は反語表現であり、結論としては、風は誰かに利となり、他の誰かには損になるという意味になります。

つまり、「One man's loss is another man's gain.」と同じ意味ということです。

306

Of two evils choose the lesser.

日本語訳

二つの悪いものからより悪くないもの
を選べ。

日本の常套句としては、「不毛の選択」
がありますが、標記の諺にピッタリな
諺は見当たりません。

人生において、様々な局面で、私たち

は選択を迫られています。可能であれば、ベストでなくても、許せる水準を超えているものを選びたいものですが、時として、すべての選択肢が水準に達していないことがあります。

「the lesser of two evils」だけで使われることもあります。

307

An eye for an eye and a tooth for a tooth.

日本語訳

目には目を歯には歯を。

標記は、日本でもよく知られた諺です。原典はメソポタミア文明のハムラビ法典とされています。また、新約聖書にも引用されています。

説明するまでもなく、標記の諺の意味は、「受けた被害と同等のものを相手に与えよ。」になります。

復讐を奨励しているようですが、復讐の限界を示していて、報復合戦を止めているとも考えられます。

308

Willows are weak, yet they bind
other wood.

日本語訳

柳は弱い、しかし、彼らは他の木を縛り支える。

日本の諺としては、「柔良く剛を制す。」が標記に通じると言えます。

「柳に風」というように、柳は大きな力をそのもま受け止めるのではなく、「受け流す」と考えられます。

この点からは、「A reed before the wind lives on, while mighty oaks do fall.」（風の前のはやぶは生き続けるのに、強い樅は倒れる。）と同じです。

さらに、標記の諺では、近くの木々を柔らかな枝で絡めて支えると言っています。

309

A Jack of all trades is a master of none.

日本語訳

すべての商売の男はどの商売の達人でもない。

日本の常套句としては、「多芸は無芸」があり、標記の諺に対応します。

最初の「A」がなくてもよく、むしろ「A Jack」が成立することが興味深い点と言えます。つまり、「Jack」は固有名詞ではなく、「man」と同義の普通名詞ということです。

因みに、「Jack-of-all-trades」で「多芸な人」という意味になり、文脈によっては誉め言葉にもなります。

310

Silence gives consent.

日本語訳

沈黙は承諾を与える。

日本の諺としてはピッタリのものはありませんが、社会的な認識としてはかなり普遍的なものと言えます。

相手の言動に対して、拒否や反対を唱えたりしなければ、賛同したと理解さ

れてもしかたありません。

もし、受け入れられないとしたら、

「No！」と言うべきです。

「gives」の代わりに「means」を使った「Silence means consent.」もあります。

311

The eyes are the window of the soul.

日本語訳

目は魂の窓である。

日本の諺には、標記の諺ほど文学的ではありませんが、「目は口ほどにものを言い。」というものがあります。

コミュニケーションにおいて、アイコンタクトが重要だと言われますが、その本当の意味が理解されていないようです。

目そのものではなく、むしろ、目の周辺の表情が、喜怒哀楽を表しているということです。

つまり、「The face is the index of the mind.」（顔は心の指標である。）ということです。

312

Jam tomorrow and jam yesterday, but never jam today.

日本語訳

明日のジャムと 昨日のジャム、しかし、決してない今日のジャム。

標記の諺は、イギリスの故事成語とも言うべき諺です。

19 世紀の作家ルイス・キャロルの「鏡の中のアリス」で、白の女王がアリスに、「1日おきのジャム」を約束しながら、「ジャムの日は、明日と昨日であり、今日ではない。」として、結局ジャムの日は来なかったことに由来してします。つまり、空虚な役に立たない約束の意味であり、省略して「Jam tomorrow.」だけでも通じます。

313

Old habits die hard.

日本語訳

古い習慣は死なない。

日本語の「因習」という言葉に、標記のニュアンスが含まれていますが、諺としては見当たりません。

文末の「die hard」の部分はブルース・ウィルス主演の「ダイハード」という映画シリーズとして知られています。

危険な中で悪に立ち向かい、孤軍奮闘で、しぶとく戦い続ける男の物語です。

標記の諺を意識すれば、「古い慣習はしぶとく残り続ける。」ということです。

314

Facts are stubborn things.

日本語訳

事実は頑固なものである。

日本の常套句としては、「厳然たる事実」があり、標記とニュアンスが近いと思われます。

「facts」とは。過去に起こったことの結果であり、覆すことができません。

「stubborn」は「性格的に頑固」とい

う意味で使われますが、標記の諺では、人に対してではなく、「確固たる」という意味で使われています。

315

Judge not, that ye be not judged.

日本語訳

裁くな、自分が裁かれないために。

キリスト教的な考え方がベースにあり、日本の諺には対応するものが見当たりません。

そもそも、裁くのは神であり、人が人を裁いてはいけないと考えられています。

した。

かなり古い諺なので、「you」の複数形の古い形「ye」が使われています。

「Judge not, lest ye be not judged.」も使われたいです。

316

An old poacher makes the best keeper.

日本語訳

年老いた密猟者が最高の見張りになる。

日本にはピッタリの諺はありませんが、「蛇の路は蛇」が標記の諺の前提となる考え方と言えます。

つまり、同じ業界や社会にいる者同士は、裏事情情報も共有しているということです。

時代背景としては、中世の貴族は、個人所有の広大な狩場を持ち、密猟者に悩まされていました。その対抗策として、元密猟者を雇って防御したということです。

因みに、よく似た諺として「Set a thief to catch a thief.」があります。

317

Failure teaches success.

日本語訳

失敗は成功を教える。

日本の常套句としては「失敗は成功のもと」がありますが、標記の諺を翻訳したものかも知れません。

また、「失敗は成功の母である。」、「失敗から学ぶことは多い。」という表現も良く耳にします。

教えられた手順通りに、間違いなく作業をしていると、より深い学びのチャンスを失うこともあります。

時には、試行錯誤してみることも必要なでしょう。

318

Revenge is sweet.

日本語訳

復讐は甘い。

日本では、「復讐」に関する諺は見当たりません。

標記は、多少陰湿で倒錯した心理を含んでいます。「どうやって復讐してやろうか」を考えることに喜びを感じるということです。

このことをさらに明確にした「Revenge is a dish best served cold.」（復讐は冷やした料理が最高である。）があります。

因みに、フランク・シナトラの「The

best revenge is massive success. 」

（最高の復讐は圧倒的な成功である。）
というポジティブな言葉もあります。

319

Keep a thing seven years and you' ll
always find a use for it.

日本語訳

物を7年間保存せよ。そうすれば、あ
なたはいつもその使い方を見つけるで
しょう。

日本では、この発想はないと言うべき
かも知れません。

ただし、洋の東西を問わず、「いつか使うかも知れない」と捨てられないでいることが少なくありません。

最近では「断捨離」という考え方が広まり、1年間使わないでいたものは、捨てるか譲るかするべきだとされています。

標記は、断捨離に真っ向から反対を唱えていると言えます。

320

Slow and steady wins the race.

日本語訳

ゆっくりと着実がレースに勝つ。

この諺はイソップ童話「うさぎとカメ」を思い出させます。

イソップは 2,500 年前のギリシャの作家です。人生の教訓を動物を擬人化して説いた人です。

標記に異論を唱えると、「slow」でなければいけないということはないということです。

この意味では、「Slow but sure wins the race.」の方がしっくりきます。

「A constant dripping wears away a stone.」（点滴石をも穿つ。）に通じる諺です。

321

Faint heart never won fair lady.

日本語訳

気弱では美人は勝ち取れなかった。

日本の時代劇に、藩主主催の御前試合の勝者が姫の婿となるというストーリーがありました。中世イギリスでは、同様のことがより頻繁にあったと思われる。

標記の諺の逆パターン、「None but the brave deserves the fair.」（勇者のみ美人を得る資格がある。）

現在では、中世の騎士道のようなことではなく、若い男のプロポーズの際の、激励に使われる諺と言えます。

322

Keep no more cats than will catch mice.

日本語訳

ネズミを捕らないネコまで買うな。

日本では「働かざるもの食うべからず。」が常套句として使われますが、これは英語の諺の翻訳のようです。

標記の諺は、「猫はネズミを捕ることが役割」という認識が前提となっています。

現在のペットブームにおいて、ファッショナブルな品種の猫しか知らない若

い人々にとっては、信じられないこと
と言えます。

323

Old soldier never die.

日本語訳

老兵は死なず。

標記は、第一次世界大戦時のイギリス
の軍歌を起原とし、第二次世界大戦後
のマッカーサーの退任時の演説に盛り
込まれ、有名になりました。

この諺には続きがあり、全体では
「Old soldier never die, they simply

fade away.」(老兵は死なず、ただ消え去るのみ。) というものです。
軍隊ばかりでなく、公的機関や民間企業で長年に亘って働いた人が退任する際の言葉として使われます。

324

Familiarity breeds contempt.

日本語訳

親しくなることが軽蔑を産む。

日本での定訳は「親しきは侮りを生む。」
です。

人との付き合いが長くなると、最初に

あった演技に近いものがなくなり、相手の本質というか、弱みや欠点が見えてきて、尊敬の念が薄れてきます。
標記の諺は、さらに進んで「侮り・軽蔑」の気持ちが出てくるとしてしています。

325

Keep your shop and your shop will
keep you.

日本語訳

あなたの店を維持しなさい、そうすればあなたの店があなたを維持するでしょう。

日本の諺にはピッタリのものは見当たりませんが、「商いは牛の涎」という言葉があり、通じるものがあります。

つまり、商いは継続することが重要であり、「飽きない」ことであると言われます。

標記の諺は、店を持ち、経営している者に対して、無暗に手を広げたりしないで、地道に続けることの大切さを説いています。

326

Once a priest, always a priest.

日本語訳

一度聖職者をすると、いつも聖職者である。

日本の諺としては、ピッタリのものは見当たりませんが、「習い性となる。」が近いでしょうか。

牧師や神父などの聖職者は、聖書を種本として、信者の前で説教をすることが仕事となります。

標記の諺が意図するところは、その職から離れたとしても、説教癖は取れないということです。

他の職業などに入れ替えて、「Once a thief, always a thief.」（一度泥棒をやるといつも泥棒）のように使われます。

327

The fault confessed is half redressed.

日本語訳

告白された過ちは半分正されている。

犯罪の場合でも、「自首」すれば罪が一段階軽くなります。標記の諺は同じ考え方と言えます。

ただし、「fault」は意図的な犯罪ではなく、意図しない失敗ですから、「正直は最良の策である。」に通じると言えます。

因みに、あまり見かけない「redress」は語源的に言うと「再び着る」であり、「(不当行為・不均衡などを) 是正する」という意味の動詞です。

328

A rich man's joke is always funny.

日本語訳

金持ちのジョークはいつも面白い。

日本には、標記の諺のようなシャレたものは見当たりません。

要するに、寒くなるようなジョークでも、金持ちが言うと、ご機嫌を取りた

がる取り巻きがヨイシヨをするということ
ことです。

因みに、「He that hath a full purse
never wanted a friend.」（満杯の財布
を持つ彼は友人に不足しない。）も同様
の意味になります。

329

Kill not the goose that lays golden
eggs.

日本語訳

金の卵を産むガチョウを殺すな。

これはイソップ寓話が起原であり、日

本にはピッタリの諺はありません。
説明するまでもなく、金の卵を産むガ
チョウがいて、一度に手に入れようと
してガチョウを殺してしまっただが、お
腹の中には普通の卵しかなかったとい
う話です。

因みに、このイソップ童話はギリシャ
に起原があり、もとは鶏の卵だったが、
英語に翻訳される際にガチョウに代わ
ってしまったということです。

330

Small is beautiful.

日本語訳

小さいことは美しい。

1970年代の日本や世界の先進国は経済発展を続け、「大きいことはいいことだ。」という風潮が蔓延しました。

この潮流にアンチテーゼとして出現したのがこの言葉です。

実は、この言葉の前に、黒人差別に対する活動のキャンペーンフレーズとして、「Black is beautiful.」があり、標記はそのもじりでもあります。

他にも「Simple is beautiful.」も使われています。

331

Fields have eyes and woods have ears.

日本語訳

野原は目を持ち、森は耳を持つ。

日本の諺「壁に耳あり障子に目あり」に対応しています。まあ、標記の諺はアウトドアであり、日本の諺はインドアという違いがあり、また、耳と目の順番が反対ですね。

つまり、洋の東西を問わず、自分の行動や発言は、思わぬ人に見られたり聞かれたりしているものだという事です。

特に、密会や密談の際には油断は大敵ですね。

因みに、日本の諺の前半部分と一致する「Walls have ears.」という諺もあ

ります。

332

Know thyself.

日本語訳

汝自身を知れ。

日本の諺としては、「敵を知り、己を知らば、百戦危うからず。」があり、部分的に対応しています。

標記の諺の起原は、ギリシャの7賢人タレス、またはソロンの言葉とされ、未来を予言するデルファイ神殿に刻まれている言葉のようです。

奥が深い言葉ですが、簡単に言えば、自分の能力とややもすると見失いがちな目的を再確認せよと言うことだと思っています。

333

Once bitten, twice shy.

日本語訳

一度噛まれると、二度目は恐れる。

日本の諺としては、古代中国から輸入された「羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹く。」が近いと思いますが、標記の諺が単純に「学習行為」と

解釈できるのに対し、日本の諺には「無用な心配」というニュアンスがあります。

同じ意味の諺として、「A burnt child dreads the fire.」（火傷した子どもは火を恐れる。）があります。

334

Fight fire with fire.

日本語訳

火とは火で戦え。

日本の諺としては、「毒を持って毒を制す。」に近いでしょうか。

相手を殺すことを目的とした戦いにおいても、すべての手段が正当化されないわけですが、古代においては、いわゆる「火責め」は特に卑劣とされていました。

そう考えると、標記の諺は「相手が卑劣な手段で来るなら、こっちもだ！」という悲惨な状況ということになります。

335

Knowledge is power.

日本語訳

知識は力である。

日本の諺としては、「知は力なり。」がありますが、標記の翻訳かも知れません。

標記は、古代から自明の理として存在していたと思われませんが、イギリスにおいては16世紀から17世紀にかけて活躍した哲学者フランシス・ベーコンの言葉とされています。

因みに、「知は力なり。」と訳された場合、「知」は「知識」と「知恵」の両方を意味することになり、標記とはニュアンスの違いが出てきます。

One beats the bush, and another catches the birds.

日本語訳

一人が藪を叩き、もう一人が鳥を捕まえる。

日本の諺としては、「犬骨折って鷹の餌食」という、あまり耳にしない古いものがあります。

つまり、苦勞して働いた者がいる一方、要領よくその成果を自分のものにしてしまう者もいるということです。

因みに、標記の諺を二人のチームワークと見れば、ポジティブな解釈ができます。個人的にはそう考えたいですね。

337

Finders keepers.

日本語訳

見つけた者、所有者。

日本では、子どもたちが「見つけた見つけた」あるいは「拾った拾った」と囃し立てることがありますが、標記はこれに近いと言えます。

要は、誰かが落としたり忘れたりしたもおを見つけた子供が自分の物と主張しているわけです。

バリエーションとして「Finder's

keeping. 」 や 「 Finders keepers,
losers weepers. 」 (見つけた者、所有者、
失くした者、泣く人。があります。

338

The road to hell is paved with good
intentions.

日本語訳

地獄への道は善意で敷き詰められてい
る。

日本の諺としては対応するものは見当
たりません。

人は、最初は善意から理想や夢を目指

してものごとを始めるのですが、いつしか「The road to hell」、つまり「地獄へ落とされるほどの悪行への道程」にいることに気づくのです。

日本で言えば、多くの政治家が辿る道程のことでしょうか。

339

Laugh and the world laughs with you;
weep and you weep alone.

日本語訳

笑いなさい、すると世界があなたと笑う。
泣きなさい、すると一人で泣く。

日本の諺としては、「笑う門には福来る。」が近いでしょうか。

笑顔で前向きに生きていると、いつしか仲間が集い、様々な協力関係もできて、「the world laughs with you」の状態になるということです。

逆に、泣いて後ろ向きに生きていると、ますます孤立して「you weep alone」ということになってしまいます。

340

The sun loses nothing by shining
into a puddle

日本語訳

太陽は泥を照らしても何も失わない。

日本の最近の常套句としては、「ダイヤモンドは傷つかない。」があります。

標記の諺の「The sun」は「偉大なもの・偉大な人」の象徴であり、「a puddle」は「価値の低いもの・悪人」の象徴として登場しています。

要は、しっかりした自分を持っていれば、悪に染まることもないという例えで使われます。

341

Fine feathers make fine birds.

日本語訳

綺麗な羽は綺麗な鳥を作る。

日本の諺としては、「馬子にも衣装」に対応します。

鳥の羽には、保護色のような地味な色から、主に熱帯地域の鳥がそうであるような、極彩色までバリエーションがあります。

標記の諺では、中間のシックな彩の鳥をイメージしているのでしょうか。

因みに、「馬子にも衣装」により近い諺として、「Clothes make the man.」があります。

The left hand doesn't know what the right hand is doing.

日本語訳

左手は右手が何をしているのかわからない。

人の体の場合、脳を損傷すると、本当に標記のようなことが起こることがあります。

しかし、標記の諺はそのことを言っているのではなく、「同じ仲間の中でも、違う方向のことをしていることがある。」ということを行っています。

新約聖書マタイ伝にも、そうならないようにしろという趣旨の記述があります。

343

One cannot be in two places at once.

日本語訳

人は同時に二つの場所にはいられない。

日本の諺としては、少しニュアンスが違いますが「心は二つ身は一つ」が近いかも知れません。

同じ人が同時に二カ所に存在しえないことは、物理学的な命題とも言えます。標記の諺が使われる状況としては、重要な仕事を同時に複数依頼された人が、「引き受けたいが、物理的に無理です。」

と断るような場合だと思えます。

344

First come, first served.

日本語訳

最初に来る、最初にサービスを受ける。

日本の常套句としては、「早い者勝ち」、
「先着順」があります。

「早い者勝ち」の方は、他の諺「The
early bird catches the worm.」（早く
来た鳥が虫を捕まえる。）がかなり近い
と言えます。

標記は、レストランのお客への対応と

してなら、しっくりきます。まさに、
「served」されるわけですから。

345

Neither a borrower nor a lender be.

日本語訳

借り手にも貸し手にもなるな。

お金の貸し借りは人間関係を壊すことは、古今東西、普遍的な現象と言えます。

そのため、標記の諺のような言葉が箴言として定着しているわけです。

特に親しい友人を想定した諺として、

「Lend your money and lose your friend.」というものがあります。文法的には、命令文として「Be」が冒頭に来るべきところですが、倒置されています。

346

One cannot love and be wise.

日本語訳

人は賢明であるまま恋することはできない。

日本では「恋の病」という常套句がありますが、標記にピッタリの諺は見当

たりません。

洋の東西を問わず、恋をすると、うっかりミスが頻発し、正常な判断ができないという状態が見受けられます。

標記の諺では、「cannot be wise」と捉えているわけです。

因みに、古くから、「Love is blind.」

（恋は盲目）がありますが、視覚障がい者差別になるので避けた方がいいかも知れません。

347

The first hundred years are the hardest.

日本語訳

最初の百年が最も辛い。

日本の諺にはピッタリのものはみあたりません。

標記の諺を理解するには、先に別の諺を紹介した方がいいようです。

それは、「The first step is always the hardest.」（いつも第一歩が一番厳しい。）です。

標記の諺はこれを前提として、「第一歩が百年かかる」というジョークとなっています。

結局、「人生や仕事は最後まで楽になることはない。」ということです。

348

A rose by any other name would smell
as sweet.

日本語訳

バラは他のどの名前と呼ばれようと、
甘く香る。

標記は、シェイクスピアの「ロミオと
ジュリエット」の前半の見せ場「バル
コニーでのジュリエットの独白」の台
詞の一部です。

要は、物事の価値はその「本質」であ
って、それがどのように呼べれようが
関係ないということです。

仏教思想にもあることであり、シェイクスピアの教養の深さを感じます。
因みに若い頃、「A rose is a rose is a rose. 」(薔薇は薔薇であって薔薇以外の何物でもない。) という表現を覚えました。

349

Leopard cannot change his spots.

日本語訳

豹は彼の斑点を変えられない。

日本の諺としては、「三つ子の魂百まで」
に対応しています。

生まれついでての性格や行動パターンは、
そう簡単には変えられませぬ。

このことを、体表に極めて特徴的な斑点のある豹を引き合いにだして諺としています。

標記の諺の起原は、新約聖書の一節
「Can the Ethiopian change his skin
nor the leopard his spots?」の後段になります。

350

Take care of the pence and the pounds
will take care of themselves.

日本語訳

ペンスのケアをしなさい、そうするとポンドは自分自身で気を付けます。

小銭を気を付けて扱っていれば、習慣がついて、大きな額のお金もおろそかにしなくなるという意味です。

ペンスとポンドを使った、「Penny wise, pound foolish.」は、「小銭はきちんと管理して賢いのに、大金を無駄遣いする愚かさ」を意味しています。

標記の米国版「Take care of your pennies and the dollars will take of themselves.」があります。

351

First impressions are the most lasting.

日本語訳

第一印象が最も長く続く。

日本の諺にはピッタリのものは見当たりませんが、「第一印象が大事」という常套句は昔から耳にしています。

おそらく、太古から、初めて遭遇した他者が敵か味方かを瞬時に判断しないと、生物は生き延びることができなかったからだと思います。

因みに、「First impressions」と、複数形であることは注意しておきたい点です。

352

Let sleeping dogs lie.

日本語訳

寝ている犬は寝かせておけ。

日本の諺としては「寝た子を起こすな」や「触らぬ神に祟りなし」に近いでしょうか。

洋の東西を問わず、犬は「番犬」として飼われていますので、例えば友人宅を訪問する際に、その番犬が寝ているようであれば、あえて起こす必要はなりということです。

使い方としては、すぐに文句を言う人には内緒でことを運ぶ際が考えられます。

353

One eyewitness is better than ten hearsays.

日本語訳

一人の目撃者は 10 人の伝聞証人に勝る。

日本の諺としては、「百聞は一見に如かず。」が極めて近いと思われれます。

標記の諺と同様の意味の諺は「Seeing is believing.」、「One picture is worth ten thousand words.」、「A picture is worth a thousand of words.」など数多くあります。

354

First step is always the hardest.

日本語訳

第一歩がいつも最も困難である。

何事を始めるにも、初期の段階は未知のことが多く、想定通りにいかないことが少なくありません。

ポジティブに捉えると、「最初うまくいかななくても、諦めてはいけない。」という教訓になります。

冒頭を「The first step」に変えたバージョンもあります。

因みに、標記の諺を前提にして、「The first hundred years are the hardest.」
（最初の百年が最も苦しい。）があります。

355

Let the cobbler stick to his last.

日本語訳

靴職人には彼の靴型に集中させろ。

日本の常套句としては、「頭の上の蠅を追え。」があり、これに近いでしょうか。

標記は、プロの画家の作品に対して、

靴職人が口出しをした、古代ギリシャの故事に由来しています。

要は、「人の領域に口出しせずに、自分の領分に徹しろ。」という意味で使われています。

因みに、「cobbler」は「靴の修繕屋」、
「last」は「(木製・金属製の)靴型」
のことです。

356

One for the mouse, one for the crow,
one to rot, one to grow.

日本語訳

一つは鼠に、一つは鳥に、一つは腐り、

一つ育つ。

日本の常套句「権兵衛が種まきや カラスがほじくる。」を思い出させますね。しかし、「権兵衛～」の場合は「全部ほじくられてしまい、徒労に終わる」という意味なので、標記の諺とは大きく違います。

上記の諺は、すべての種が芽を出し育つのではなく、いわゆる「歩留まり」が 25%であることを覚悟しておきなさいということです。

イギリスの農夫が、この言葉に節を付けて種まきをしたようです。

357

First things first.

日本語訳

最初の物は最初に。

優先順位の中でもとりわけ最初に取り組むべき事項のことですが、日本の諺としてはピッタリなものは見当たりません。

言うまでもなく、時間管理の意味からも、最も重要なことから議論すべきであり、標記は、会議の進行役が冒頭に「First things first.」と発言すべきフレーズと言えます。

因みに、レトリックとして優れていますが、「things」と複数形であることに

は注意が必要です。

358

The rotten apple spoils the barrel.

日本語訳

腐ったリンゴは樽を損ねる。

リンゴの実は完熟する際にある種のエーテルを出し、他の実もその影響を受けて熟する速度を増すことになります。経験則として、日本でも広く知られていることですが、諺としては見当たりません。

標記は、たくさんのリンゴが樽に入っ

ていて、たった一つの腐ったリンゴが
すべてをダメにするとしています。

変化形として「One rotten apple
injures its neighbors.」（一つの腐っ
たリンゴはその近所を 痛める。）が
あります。

359

Let them eat cake.

日本語訳

彼らにケーキを食べさせなさい。

18 世紀末のフランス革命の渦中で、ル
イ 16 世の王妃マリー・アントワネット

は処刑されています。

標記の言葉は、その直前に、家臣から「国民がパンを食べられないと嘆いている。」と伝えられた際の王妃の言葉とされています。

この言葉がさらに国民の怒りを買って、革命に繋がったとされていますが、どうも後世のフィクションのようです。拍手したくなるような使い方はどのようなものでしょうか。

360

Take time by the forelock.

日本語訳

前髪で時を掴め。

英語で「Old Father Time」と呼ばれる「時の神」が存在し、その神には前髪しかないとされています。

このような背景があって初めて理解できる諺であり、当然日本の諺には対応するものではありません。

要するに、他の諺「Opportunity knocks but once.」（機会は一度だけノックする。）同様、「チャンスを逃すな」ということです。

361

The fish always stinks from the head downwards.

日本語訳

魚はいつも頭から下にかけて悪臭を放つ。

日本でも、「魚は頭から腐る」という認識は常識的なことのようにです。

標記の諺では、日本とは異なり「腐る」ではなく、「悪臭を放つ」としています。この点は違いますが、「それまで実績のある組織や団体でも、後継のリーダーに人を得ないとダメになる」という意味で使われるところは一致しています。リーダーとしては、この諺を使われないように頑張らないといけません。

362

A liar is not believed even when he tells the truth.

日本語訳

嘘つきは、彼が本当のことを言う時も信用されない。

標記の諺はイソップ寓話の「狼と少年」を下敷きとしたものです。

説明するまでもないと思いますが、この物語の概要は以下の通りです。

古代ギリシャ時代、村人に注目してもらいたい「羊飼いの少年」が「狼が出た」と嘘をついて騒ぎを起こした。何回かは少年の言葉を信用した村人たちは、本当に狼が襲ってきた時は信用せ

ずに、少年は殺されてしまった。
普段から正直な言動をしておくことが
大切であるという教訓です。

363

One must draw the line somewhere.

日本語訳

どこかに境界線を引かねばならない。

日本の諺としては「和して同ぜず」が
対応しています。

そもそも、「和して同ぜず」とは、人と

の付き合いにおいて、「協調を基本としながら、けじめを付けて、なれ合いにはならない」という意味です。

標記の諺は、抽象的で様々な解釈も可能ですが、「協調となれ合い」の境界線を設定するという意味に限定して使われています。

「must」でなく「has to」でも使われます。

364

A fool and his money are soon parted.

日本語訳

愚か者と彼のお金はすぐに離れる。

日本にも「悪銭身に付かず」や「地獄の沙汰も金次第」など、「お金」に関する諺は少なくありませんが、対応するものは見当たりません。

お金は、古今東西、悲喜こもごもの出来事に関係しますが、標記の諺は、賢く使うことの難しさを教えています。

人に騙されたり、無駄遣いしたり、程度の差こそあれ、ほとんど愚か者ではないでしょうか。

365

Liars should have good memories.

日本語訳

嘘つきは良い記憶力を持たねばならない。

日本の古い諺として、「嘘はうしろから剥げる。」というものがあるようですが、ピッタリとは言えません。

事実に関することであれば、記憶のままに語っていれば矛盾は出てきません。しかし、一度嘘をついてしまうと、関連したことを話す場合は、辻褄を合わせるのが変です。

誰もが小さな嘘をついたことがあるでしょうから、標記の諺には頷けるものがあると思います。

やはり、「Honesty is the best policy.」ということです。

366

One nail drives out another.

日本語訳

一つの釘が他の釘を抜く。

日本の諺「毒を持って毒を制す。」に、一面では対応していますが、別の使い方もあるようです。

個人的な経験かも知れませんが、子どもの頃、なぜか抜けない釘の近くに別の釘を打つと、前からの釘が浮いてくることを教わりました。

因みに上記の別の使い方とは、眠って

いた愛情などの思いが、新しい刺激で蘇ることの例えとしての使い方です。

367

Fish and guests stink after three days.

日本語訳

魚とお客は三日後に悪臭を放つ。

「客」に関する日本の諺としては、「客と白鷺は立ったが見事」というものがあります。

つまり、長居して疎ましく思われぬ内に帰ることを奨励する言葉です。

標記の諺は、魚が時間が経つと腐臭を放つように、お客も歓迎の気持ちを見失わせることを意味しています。

より分かりやすい諺として「Do not wear out your welcome.」（あなたの歓迎をすり減らすな。）があります。

368

Save me from my friends.

日本語訳

私の友人たちから私を守れ。

日本の諺には、近いものは見当たりません。

標記の諺の状況は、例えば当人にトラブルが発生した際に、友人たちが心配して、様々な申し出をしてくれ、ありがたいけれども、煩わしいというものです。

冒頭の「God」という呼びかけが省略されていて、「守り給え」と訳すべきかも知れません。

「Save us from our friends.」も使われています。

369

Life begins at forty.

日本語訳

人生は 40 歳から始まる。

論語に「四十にして惑わず」という言葉があり、40 歳にして人生の目標を自覚するとされています。

また、リンカーンの言葉として「40 歳過ぎたら自分の顔に責任を持て！」があります。

確かに、個人差や巡り合わせもありますが、概ね 40 歳になれば、人はそれなりの経験を重ねているということです。因みに、1980 年に、ジョン・レノンはこの題名の曲を発表しています。

Talk of devil and he is sure to appear.

日本語訳

悪魔の話をせよ、さらば彼は必ず現われる。

日本の諺としては、江戸時代の滑稽本「東海道中膝栗毛」に登場する「噂をすれば影がさす。」に対応します。

標記の諺の場合、会いたくない人間の話をするなというニュアンスもあると思いますが、話題の主が出現するという経験は、洋の東西を問わず少なくないのも事実です。

「Speak of the devil and he will appear.」（悪魔のことを話すと悪魔が

現れる。)など、バリエーションが数多くあります。

371

Fools build houses and wise men live in them.

日本語訳

愚者は家を建て、賢者はそこに住む。

これは文化的な価値観の違いであり、日本の諺には対応するものが見当たりません。

日本も、江戸・明治・大正までは、借

家住まいが圧倒的だったと思いますが、昭和のいつの頃からか日本では持ち家が奨励されてきたように思います。

標記の諺の背景にある状況は。大金をはたいて家を建て、資金が底をついて、自分では住めなくなり、人に貸す羽目になるというところでしょうか。

372

Lightning never strikes the same place twice.

日本語訳

雷は二度と同じ所には落ちない。

日本では諺にはなっていませんが、同じ認識は経験則として知られていたと思います。

確かに、避雷針などで誘導した場合を除き、自然界では落雷の場所はかなりランダムのように思われます。

しかし、一度落雷した場所が、本当に安全かは 保障の限りではありません。

標記の諺から「the same place」を省略した「Lightning never strikes twice.」も使われます。

因みに、逆説的な「Misfortunes never come singly.」（不幸は単独では来ない。）という諺もあります。

One of these days is none of these days.

日本語訳

近いうちの一日は近いうちにはない。

最近の日本の諺としてはピッタリのも
のは見当たりませんが、歴史的には
「紺屋の明後日」が「あてにならない
約束」の意味で使われていたようです。
現代的には、「そのうち一杯やりましょ
う！」はほとんど実現することがない
ので、近いものがあります。
同じ当てにならない約束の意味で
「Tomorrow never comes.」があります。

374

Fools rush in where angels fear to tread.

日本語訳

愚か者は、天使が足を踏み入れることを恐れるところに、飛び込む。

日本の諺としては「盲蛇におじず。」がありますが、最近では障がい者差別的な発言として避けるべきかも知れません。

また、「怖いもの知らず」には「無鉄砲な行為」という意味もあり、標記の諺

と通じるものがあります。

因みに、「angels」を登場させたのは18世紀に活躍したイギリスの詩人アレキサンダー・ポープとされています。

375

Like breeds like.

日本語訳

類は類を産む。

日本の常套句としては、「蛙の子は蛙」が対応しています。

また、「この親にしてこの子あり」も通じるものがありますが、標記の諺より、

「Like father, like son.」や「Like mother, like daughter.」がピッタリと言えます。

因みに、「breeds」を「attracts」に代えた「Like attracts like.」（類は友を呼ぶ.）という諺もあります。

376

One pair of heels is often worth two pairs of hands.

日本語訳

一組の踵は二組の手に度々値する。

「逃げるには足が必要であること」を

婉曲的に表現していますが、意味としては日本の諺「三十六計逃げるが勝ち。」に対応しています。

つまり、戦いにおいて、戦況が不利な場合、逃げるのが最善の選択肢であることは少なくありません。

時には逃げることを奨励する諺として、「He who fights and runs away may live to fight another day.」があります。

377

Forbidden fruit is sweetest.

日本語訳

禁じられた果物が一番甘い。

この諺の背景には、エデンの園でのアダムとイブの物語があります。

日本でも「禁断の果実」という表現が広く知られていますが、起原は上記と同様です。

美味しいので、禁断にしているわけですが、許されていないものの悪魔的な魅力というものもあると思います。

さらに背徳的な「Stolen fruit is sweetest.」という諺もあります。

378

Second thoughts are best.

日本語訳

二番目の考えが最高である。

ギリシャの哲学者エウリピデスの言葉とされ、日本の諺にはピッタリのものは見当たりません。

一度考えて決めたことを、批判精神をもって見直すことを奨励している諺と言えます。

諺としての使い方に加えて、「give a second thought」は「考えを見直す」という意味になり、「on second thought」は「見直してみると」という意味になり、大変便利な表現と言えます。

379

Little and often fills the purse.

日本語訳

少量で繰り返しが財布を満たす。

日本の諺としては、「塵も積もれば山となる。」に通じるものがありますが、標記は特にお金のことを言っています。

要するに、小さな金額でも、コツコツと貯めていけば、いつかは馬鹿にならない大金になるということです。

因みに、上記の日本の諺にピッタリのものは、「Many a little makes a

mickle.」や「Every little helps.」
があります。

380

Tell the truth and shame the devil.

日本語訳

真実を話して悪魔を恥入れさせろ。

元は翻訳かも知れませんが、今や日本の諺になっている「正直は最善の策」と同じ意味になります

人は嘘をついて、非難や叱責から逃れようとしませんが、これは悪魔の囁きによるものであり、この誘惑に打ち勝て

れば、悪魔が頭を搔くということです。

「Speak the truth and shame the devil.」も使われていて、こちらの方が多少韻を踏んでいると言えます。

381

Forgive and forget.

日本語訳

赦して忘れろ。

日本の諺にはピッタリなものは見当たりません。

イメージ的には、聖書の中の言葉のように思われますが、実際にはそのものズバリはないようです。

現代史的には、南アフリカのアパルトヘイト政策を終焉へと導いたネルソン・マンデラ氏の言葉と言えそうです。

「Let bygones be bygones.」（過ぎ去ったものは過ぎ去ったものにしておけ。）という諺と通じるものがあります。

382

A little pot is soon hot.

日本語訳

小さなポットはすぐに熱くなる。

「すぐに怒る器の小さな人物」を話題にする際に使われますが、日本の諺と

しては対応するものは見当たりません。
最近では耳にしません、20 世紀の終
わりまでは、すぐ切れる人のことを
「瞬間湯沸かし器」と呼んでいました。
もはや歴史的な言葉ですが、水を加熱
する道具である点では、標記の諺と通
じるものがありますね。

383

One year's seeding makes seven
years' weeding.

日本語訳

1年の結実は7年の除草を作る。

標記の諺には、用語と状況の説明が必要です。

「seed」は、動詞としては「種を蒔く」が基本的な意味ですが、ここでは、

「seeding」は「植物が育って種をつけること」と解すべきでしょう。

つまり、雑草を1年放置して種まで付けさせると、7年間の「weeding」が必要になるということです。

教訓としては、「問題は初期段階で対処せよ。」ということです。

384

Fortune favors the brave.

日本語訳

幸運は勇者を好む。

日本の諺には、「勇者」を題材にしたものは見当たりません。

「義を見てせざるは勇なきなり。」と「勇氣」に関するものはありますが、標記とは繋がりません。

成功が保障されていないことにも、勇気を出して挑戦しなければ、成功という幸運は得られないということです。

「brave」の代わりに「bold」（大胆な）にした「Fortune favors the bold.」も使われています。

385

Little strokes fell great oaks.

日本語訳

小さな打撃が大きな樫を倒す、

日本語と違い、英語の名詞は単数と複数を使い分けていますが、標記の諺は、「strokes」と複数になっている点の意味をもっています。

つまり、1回の打撃ではなく小さいけれど繰り返しの打撃が、堅く頑丈な樫の木をも倒すという意味になります。

日本の諺としては「点滴石を穿つ。」がありますが、これは「Constant dripping wears away stones.」の翻訳と考えられます。

386

Open confession is good for the soul.

日本語訳

公開された告白は魂にとって良い。

キリスト教会に懺悔室があるような文化とは異なり、日本の諺には対応するものが見当たりません。

要するに、罪悪感をかかえながら、まして、犯罪者であることを隠しながら生きるのは苦しいことであり、むしろ告白してしまった方が、精神衛生上良いということです。

因みに、「告白」を含んだ別の諺「A fault confessed is half redressed.」
（告白された失敗は半分正されている。）
があります。

387

Fortune knocks at least once at every man's gate.

日本語訳

幸運は、少なくとも一度は全ての人の
門を叩く。

神は平等であるという考えは、日本では弱いのか、標記に対応する日本の諺

は見当たりません。

ここでの教訓は、幸運が訪れてきたことに気づかないでいてはいけないというこどです。

これが、幸運を掴む人と掴めない人との違いです。

標記の変化形が、「Fortune knocks once at every man' s door.」や「Opportunity knocks but once.」があります。

388

See Naples and die.

日本語訳

ナポリを見よ、そして死ね。

日本の諺としては、「日光見るまで結構というな。」が対応しています。

中世、イタリア半島南部のナポリ王国の首都ナポリは、美しい都と言われ、イタリア以外でも評判になっていました。

標記の諺は、この世に生れてきたからには、評判の美しい都を一度は観光しなさいという意味です。

「then」を加えた、「See Naples and then die.」という変化形もあります。

Little thieves are hanged, but great ones escape.

日本語訳

小物の泥棒は吊るし首にされ、大物は逃れる。

日本の常套句としては、「巨悪は死なず。」でしょうか。

泥棒を経済犯罪まで拡張して考えると、かなり実感があると思われます。

つまり、空き巣や置き引きなどの泥棒は頻繁に起こり、沢山捕まっている、一方、計画的で大きな犯罪は犯人が逃げ切ることが多い、というイメージがあるということです。

実際のところは、科学的な統計処理を

しないと何とも言えませんが、歴史的にこのようにイメージされてきたことは事実です。

390

That's the way the ball bounces.

日本語訳

それはボールの跳ねる方向である。

物事は、ボールが弾むように、方向が予想できない、どうなるかわからないという意味で使われます。

日本の諺にはピッタリなものは見当たりません。

同じ意味を「cookie」の割れ方に例える「That's the way the cookie crumbles.」（クッキーが割れる時はそんなもの。）という諺もあります。

因みに、「catch the ball before the bound」は、「機先を制する」という意味になります。

■英語の諺 391-400

391

A friend is not so soon gotten as lost.

日本語訳

友人は失うほどすぐには得られない。

日本の諺にも「友」に関するものは少なくありませんが、ピッタリのものはありません。

経験則として、「失うは易く得るは硬し」は普遍的であり、標記は「友」もその一つであるとしています。

そう考えると、「A friend」は「Money」や「Health」などに置き換えても成り立つと思われれます。

標記の諺と同じ意味になる「A friend is easier lost than found.」があります。

Little things please little minds.

日本語訳

小さな事は小さな心を喜ばす。

「minds」は「～の心を持った人」の意味であり、「little minds」は「小さな心を持った人」、つまり、「小人・小人物」ということです。

「小人」が含まれる日本の諺としては、「小人閑居して不善を為す。」がありますが、標記に対応したものは見当たりません。

「please」の代わりに「amuse」を使った「Little things amuse little minds.」、また、「little」の代わりに「small」を使った「Small things

please small minds.」もあります。

393

Opportunity knocks but once.

日本語訳

機会は一度はノックする。

日本の諺にはピッタリのものは見当たりません。

「Opportunity」を「Fortune」に代えた「Fortune knocks but once.」の方が有名ですが、ニュアンスの違いがあります。

「Fortune」の場合は、結果が保障され

ているのに対して、「Opportunity」の場合は、「挑戦する権利」であり、結果の保障ではありません。

「Opportunity seldom knocks twice.」
という変化形もあります。

394

From clogs to clogs is only three generations.

日本語訳

木靴から木靴までわずか3世代である。

「clog」は木製の履物であり、革靴を購入できない貧しい階層であることの

象徴として登場しています。

要するに、一度裕福になり中流以上の生活ができるようになっても、何かのきっかけで没落して貧困層に戻るには、わすか3世代しかかからないということです。

同じ意味の「From shirtsleeves to shirtsleeves in three generations.」

（シャツ姿からシャツ姿まで3世代）
があります。

395

Live and let live.

日本語訳

（自ら）生きよ、そして（彼らも）生かせ。

日本の常套句としては、「共存共栄」ということですが、ニュアンスは大きく違います。

中世ヨーロッパ、カソリックとプロテスタントの確執や戦争が長く続き、相容れないながらも共存していかなければならないという思想＝リベラリズムが生まれられました。

因みに、この諺をもじった「Live and Let die」は、映画「007 死ぬのは奴らだ」の原題です。

396

Opportunity makes a thief.

日本語訳

機会が泥棒を作る。

日本には「盗人にも三分の理」という常套句があります。

主に、貧困で空腹で、やむを得ず盗んだということですが、「盗まれた側の不用心」もこの「三分の里」に含まれると思います。

標記の諺の「Opportunity」が「盗まれた側の不用心」に相当すると言えます。具体的な侵入経路に言及した「A

postern door makes a thief.」(勝手口が泥棒を作る。) という諺もあります。

397

Full of courtesy, full of craft.

日本語訳

礼儀いっぱい、企みいっぱい。

日本の諺としては、論語の教えである

「巧言令色鮮し仁(こうげんれいしよくすくなしじん)」があります。

巧みな言葉と満面の笑みの裏には下心があると教えています。

標記の諺中の「courtesy」は「礼儀正

しき・礼節」という意味です。また、「craft」は「aircraft」が「空の船＝飛行機」であるように、元は「船」から始まり、「技術・技巧・巧妙さ」となり、ここでは「企て」の意味になっています。

398

Seek and ye find.

日本語訳

捜せ、されば汝は見つける。

現在の言葉に直せば、「Seek and you shall find.」になります。

日本の諺としては、ピッタリではありませんが、「犬も歩けば棒に当たる。」に通じる面もあります。

標記は、新約聖書の「Ask, and it shall be given; seek, and ye find; knock and it shall be opened unto you.」（求めよ、さらば与えられん。訪ねよ、さらば見いだされん。門をたたけ、汝に開かれん。）の一節に由来しています。

399

A live dog is better than a dead lion.

日本語訳

死んだライオンより生きている犬が良い。

日本の諺としては、「死んで花実が咲くものか」や「命あってのものだね」があります。

標記の諺において、「lion」が「偉大な人物」、「dog」が「普通の人」の象徴として登場しています。

要は、生きていれば、何かを為すチャンスが残っているので、命を粗末にしないようにという意味になります。

「A live dog」ではなく、「A living dog」でも良いようです。

400

There are no birds in last year's nest.

日本語訳

昨年の巣の中に鳥はいない。

日本の諺としては、「株を守る。」や「柳の下にドジョウはいない。」が対応しています。

鳥の種類によって、習性は違うと思いますが、以前の巣を繰り返し使う鳥は少ないのかも知れません。

ビジネスでは、成功体験を十分に分析しないまま、前例踏襲することの戒めとして使えそうな諺と言えます。

「of this year」を補った「There are

no birds of this year in last year's nest.」という変化形もあります。